「なつ」と「夏」

「夏もちかづく八十八夜、～♪」。
５月に入り、きゅうにあつくなりました。
昔のこよみでは、４･５･６月は夏。
今年のこよみを見ると、５月５日が「立夏（りっか）」となっています。
なぜ「なつ」というのでしょうか。なぜ漢字では「夏」と書くのでしょうか。

「夏」のもとになった漢字

これからは、気温が高くなるので、いろいろなものが「熱（ねつ）」をもちます。そして「あつく」なります。また、田んぼのイネが育ち、イネが「成り立つ（なりたつ）＝おおきくなる、育つ）」ようになります。これらのことばから、この時期を「なつ」と言うようになったそうです。でも、まだ漢字はありませんでした。

さて、次は漢字。漢字は、お経（おまいりのときにみんなでとなえる文）が伝わってくるときに中国からはいってきたのです。
「なつ」の漢字を、なぜ「夏」にしたのでしょうか。

（漢字をつくる係りと博士の会話でせつめいしましょう。たぶんこんな会話が合ったと想像します）

文字係り「博士、（なつ）という言葉には、どんな漢字をあてましょうか？」
博士　　「そうだなあ、中国で（なつ）によく行われていることは何かな？」
文字係り「はい、（カ）というおどりがあります。これは、顔に面をかぶっておどります。漢字では（夏）と書きます」
博士　　「そうか、それでは、（なつ）という言葉の漢字を（夏）にしよう！」

こうして、「なつ」に「夏」という漢字をあてることにしたのです。
会話は、想像して作りました。線を引いたところは昔からの説です。

これからは気温が高い日が多くなり、体の調子をくずしやすくなります。
コロナウイルスのために休みがつづきますが、健康に気をつけてすごしましょう。
それでは、また。

まとめ：「なつ」ということばは、（ねつ）、（あつい）、（なりたつ）からできた。
このあつい季節に、中国で（カ）という踊りがあった。漢字で書くと「夏」。
だから、この暑い季節を「なつ」といい、漢字で「夏」ということにした。